

第四十一回 わたしからの 人権メッセージ

2021年度 特選作品集

堺市人権教育推進協議会

特選作品集

わたしからの人権メッセージ

第四十一回

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたつて

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つかが、本年度で第四十二回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え緩ることによつて人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発になげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、現在においても、インターネットによるいじめや部落差別、女性などに対する差別や偏見、また虐待など心を痛める事象が起っています。また、コロナ禍

における感染者やその家族への差別、貧困・失業など社会的弱者の置かれている状況が明るみとなり、新たな課題が見えてきました。さらに、世界では、多くの人々の尊い命が、戦争や民族紛争等により失われています。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを推進し、「誰一人取り残さない」持続可能な未来への目標であるSDGs^{エスディージーズ}の達成に向けて取り組んでいます。

本冊子には人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真つ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。私たちは、さまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

本冊子が、一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのかかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

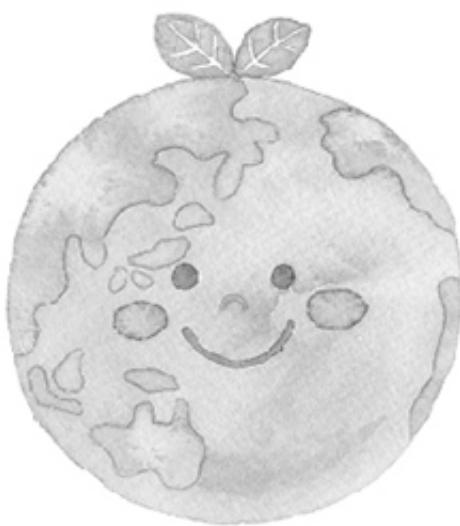
二〇二二年十一月

九

- コロナウイルス
- 障がい者の人権
- 「広島、長崎からの伝言」を読んで
- スーパーヒーロー
- いじめについて
- 幸せに生きる権利
- 聴覚障がい者の人権の差別
- 障害者の人権
- 自分の経験をいかして

- ありのままの幸せ
- 青海原を見続けるために
- 新型コロナウイルスが奪つたものと見せたもの
- その一心で命は救える
- 今の私たちにできること
- キャリア選択のジエンダーギャップ
- 希望を持つて生きる
- ただ、違いを認識する
- コロナ禍で大切にしたいもの

※御本人の許諾を得られたものを掲載しております。



コロナウイルス

小学校一年

服部

葵

わたしは、コロナウイルスが、だいきらいです。どうしてかというと、コロナのせいで、マスクをしないといけないし、いきたいところがあるのに、いけなくなつたりしました。コロナがなかつたら、マスクをはずして、みんなで、つくえをつなげてきゅうしょくをいつしょにたべたりできるのに、コロナウイルスが、あるから、いやなことがいっぱい、あるから、マスクをつけたり、しておかないとダメだからいまは、がまんをしているよ。コロナウイルスがなければ、いきたいところに、いけたのに、いっぱいできなくなつちゃつたよ。でも、コロナウイルスは、しようがないよね。なつばは、マスクがくるしいけど、くるしいのをのりこえて、みんなで、コロナウイルスを、がんばつて、おいだそう。

コロナウイルスを、がんばつて、おいだしたら、かぞくで、いろんなところいきたいです。コロナウイルスがなかつたら、いままであそんだ、おともだちもいっぱいあそびたいです。

障がい者の人権

小学校五年

東出桜里

人権とは、人の権利（健康に生きてたくさん学び自由に活動し国から守られ助けられながら生きていく権利）であり、全ての人々が人間らしく生きる権利で生まれながらに持つてある権利であって、誰にとつても大切なものの、日常の思いやりの気持ちによつて守らなければならないものです。

例えば、「女だから」と言つたり、「子どもだから」と言つたりして、その人をばかにしたり、いじめをしたりする人がいます。女も子どももみんな同じ人間だから、これはまちがつてゐる言葉だと思います。相手に気持ちを考えた時に、「子どもだから」「女だから」と言つてばかにしたりするのは良くない事です。

私には、障害のある弟がいます。話す事も立つたりする事も歩く事もできません。だから、お母さん、お父さん、私も手伝つて色々な事をやつていています。そうする事で、弟もよろこんでくれるし、お母さん、お父さんもよろこんでくれます。でも、私にとつてはそれが当たり前な事なのですが、外を歩いていると、車イスに乗つている弟を見たる人達は、弟の事をジロジロ見たり、小さい子が、「あの子大きいのにベビーカー乗つ

ている」「歩けばいいのに」と言つたりしてきますが、どうして車イスに乗つている弟をジロジロ見るのか不思議でした。でも私には当たり前の事で、ふつうの事だと思うから、わからなかつたら、私とお母さんに聞いてくれたらいにと思いました。

最近になつて思う事は、障害のある人をジロジロ見るけど、困つてゐる時はなぜ声をかけたりしないのか、声をかける事が勇気のいる事で、できない人がいるんだなという事です。お母さんは、弟の車イスを押して電車に乗る時、いつも段が大変そうです。そんな時に、声をかけてくれる人がいると、「いつもありがとうございます」と、何回も言つてます。そして私もお母さんも「いい人やな」「良かった」と笑つています。だから、私も障害のある人が、生活していきやすいように、思いやり、助けてあげる気持ちが当たり前になるように、声をかけていつたり、困つてゐる人がいたら、手伝つてあげられたらしいなと思います。

今、私にできるSDGs

小学校五年 曽我部凜花

私は今回、SDGsの5番と11番を調べました。5番を選んだ理由は、クラスでSDGsについて話し合った時、話が広がったからです。

その時に出た例が、「スカート」でした。確かに、女の人はスカートもズボンもはくのに、男の人がスカートをはくと、なぜからかわれるのだろうと思いました。そうすると、ますます調べたりました。

5番の目標は、ジェンダー平等を実現しよう。つまり、性別の差別なく皆平等に、という意味です。日本では昔から、女は家の事をして、男は外で働くものとされてきました。だから、女の人が外で働いても、給料が少ないので。私は、日本のジェンダー平等がどれくらいできているか知りたくて、世界ランキングを調べました。すると、日本は何と153か国中121位でした。低くてびっくりしました。1位はアイスランドという国でした。日本と比べると大きな違いがある事が分かります。例えば、男性の育児休が取れりつは、日本が6%、アイスランドは85%です。国会議員の女性比率は、日本が10%、アイスランドは38%です。アイスランドでジェンダー平等がす

すんだのにはきつかけがありました。1975年に男女賃金格差が60%近くあつたことに抗議し、同一賃金を求めて国の女性の90%が一日仕事と家事を止めて「デイオフ」を取ったストライキです。結果、家事や職場から多くの女性がはなれたことで、社会における女性の存在感を示しました。

ストライキ後、女性の政治進出が進んだようです。さらに、ストライキの5年後には、国民から直接選挙される大統領選挙で初めて女性が大統領として選ばれました。

日本も、アイスランドをお手本にしてジェンダー平等がもつと進むとよいと思います。

次に、11番の「住み続けられる街づくりをしよう」を選んだ理由は、「私達が住む日本は、住み続けられる街なのかな?住み続けられる街ってどんな街?」と思つたからです。住み続けられる街にするには、地いきの人々の関わりが大切です。地いきの人々の関わりがうすいと、例えば、災害などのときに、助け合うことができず困るし、街の復旧も遅くなってしまいます。

金沢のある制服のリユース会社では、制服のおさがりを他のちいきで有効活用すること、家計の負担を減らし、他の地いきの人と人の新しいつながりを作つているそうです。この話を知り、思つた事があります。私の姉が今年、小学校を卒業しました。姉は6年間大切にランドセルを使つていたので、傷も少なくきれいなまま残つていま



す。私は、そのランドセルが世界のどこかで活やくしてほしいと思います。もしそれが実現するなら私のランドセルも卒業後に活用してほしいです。そういう人と人のつながりのある世界になるといいと思います。

これからも、私にできるSDGsを考えていきたいです。

「広島、長崎からの伝言」を読んで

小学校六年

一九四五年八月六日に広島、九日には長崎へとアメリカ軍は二発の原子爆弾を日本に投下しました。空しゅうで家をなくした大人達、お父さんやお母さんを亡くした子ども達、戦争が終わつた後も放射能による被爆で苦しむ人々のことがこの本に書かれています。今年原爆資料館へ行つたことがきつかけで私はこの本と出会いましたが、読んでいる内になみだがあふれました。もちろん私は戦争を知りません。私のお母さんやおばあちゃんも知りません。でも私のおばあちゃんのお母さんはこの戦争を体験しています。おばあちゃんは今、九十二さいで広島県福山市に住んでいます。私はこの本についておばあちゃんに戦争の話を聞くことができました。実際に戦争を体験した人から話を闻けるのは、今ではとても貴重です。私はおばあちゃんからたくさんのことを学びました。たつたの数秒でたくさん人の尊い命や、当たり前の日常生活がうばわれたこと。大量の放射線と熱風で一しゆんにして町が消えたこと。そして、自分の意志と関係なく戦争にかり出され、どんなに家族といっしょにいたくてもいられない。戦争は何人の人権や気持ちをつぶしていつたこと。おばあちゃんの話を聞い

て私はどうしたら世界から戦争がなくなるかを考えてみました。もしも、日本とアメリカの人達がこの戦争で起こつた悲しい出来事を一人でも多くの人に伝えることができたら、世界は今よりもっと平和になると思います。戦争を知らない人に戦争のことを見つめらうのはとても大切なことだとこの本を読んで思いました。当たり前のことをだけれど、私にはお父さんがいてお母さんがいて弟もいます。当たり前のことだけれど、私のおうちのばんご飯は毎日おいしくて、私はそれをおなかいっぱいに食べます。当たり前のことだけれど、朝目が覚めた時、私は「今日」という日にワクワクして、学校へ行くとそこには大好きな先生がいて友達がいる。戦争のことを色々と知るまでは何も感じなかつた。当たり前のことが、今ではとても大切に感じられるようになります。これからは、お母さんの言うこともよく聞いてお手伝いも勉強もがんばろうと思います。そして次の夏休みもつと戦争の本を読んでみようと思います。

スーパーヒーロー

小学校六年 石丸岬希

ぼくの将来の夢は、医者になる事です。幼い頃に、ぼくの病気を治してくれた医師に出会えた事が、きっかけでした。その医師は、ぼくにとつてのスーパーヒーローでした。でも最近、このコロナ禍で、そんなスーパーヒーローであるはずの医師たち（医療従事者）が、差別にあつているという事を知りました。患者さんから感染しているかもしないから、医療従事者には近づかない方がいいと言うのです。医療従事者の子供とは遊ばないよう言つている親もいると聞きます。ぼくは、その話を聞いた時、とてもおどろいて、ものすごくショックを受けました。そして、何を言つているんだろうと思いました。コロナウイルスに感染してしまった人も、好きで感染したわけではありません。何かのバツで感染したわけでもありません。コロナウイルスは、病気なのです。そして、その病気にかかつて苦しんでいる人たちがいるのです。どうしてそんな人たちが、差別を受けなければならないのでしょうか。そして、医療従事者の人たちとは、そんな人たちを一人でも多く救いたいと毎日、必死で働いているのです。その人たちをまるで病原体のようにして差別する、そんな事は絶対にあつてはならないことだと思います。

差別をする人たちは、知識が足りないのだと思います。だから、うそのうわさ話を信じてしまつたりするのだと思います。差別をなくすためには、みんなが正しい知識を学んで、自分でしつかりと考えることが大事だと思います。ぼくも、たくさんの事を勉強して、正しい知識を身につけて、人の痛みがわかる、あこがれのスーパーヒーローのような医師になりたいと思います。

いじめについて

中学校一年 富士杏奈

ユーチュープを見ている時、私は一つの動画に出会いました。

「十四歳女子中学生いじめ凍死事件。」

自殺と言われていますが、これは殺人だとも言われています。そもそもこの事件が起つた理由は「いじめ」。被害者の方は上級生や他校の人からひどいいじめを受けていました。担任の先生は、いじめは起こっていないと被害者のお母さんにうそをついていたそうです。

私はいじめをする人の気持ちがよく分かりません。嫌いだから? 気に入らないから? それだけでいじめた理由になるのでしょうか。私はならないと思います。なぜなら、いじめられた子が自殺してしまったり、そのいじめがトラウマになつて学校に行けなくなつたらどうするのでしょうか。罪悪感や後悔をせおしながら生きていくのでしょうか。どちらにしても、いじめたという事実は死ぬまでついてきます。ニュースに出ていないだけで、きっといじめは他の学校でもおこつていると思います。

この世のすべてのいじめをなくすことは難しいかもしれませんのが身近にいじめが起こつてしまつた場合は、なくせるかもしれません。

一つ目は、「友達といつしょにいじめられている子に話しかける。」です。一人でいたら、こんどはその子がいじめられてしまう可能性があるので一人でも多くの仲間を連れていじめられている子を助けましょう。

二つ目は、「信用できる大人に相談する。」です。自分たちの手で止められないと思つた時は、先生や両親に相談すればいじめはなくなると思います。

私は、この作文をとおして、人権について考えることができたんじやないかなと思います。人権とは、「人が人として生きる権利」だと教わりました。昔は、ひどいことを言つて人を傷つけてしまつたけど、今度からは発言に気をつけて人と接しようと思ひます。

もう一つ、作文を書いていて気づいたことがあります。それは、「自分が動かない」と何も解決しない。ということです。気がついたらがんばつて行動に移すことが大切だと分かりました。いじめはいつ自分が加害者になるか被害者になるか分かりません。被害者になつたら、誰かに助けを求める、加害者になつたら、いじめたことを反省する、どちらでもない場合は、いじめられている子を助ける。この三つを大切にしたいです。

幸せに生きる権利

中学校一年 猿田ゆらさるた

私は、人権とはどういうことが考えてみました。それは、人間が人間らしく生きていく権利だということを知りました。人間が人間らしくという言葉は当たり前だと思つていたので、どういうことを意味するのか考えてみました。

「高齢者社会」日本では二〇四〇年に六五歳以上の高齢者が人口の三分の一になるとニュースで観ました。介護という言葉も日常的に使われている現在、私にも九二歳の曾祖母がいます。曾祖母のお世話は毎日私の祖父母がしています。私の祖父母も七十歳前の高齢者です。高齢化社会と一言ではわかりにくいですが、高齢者が高齢者をお世話するということだと気づきました。私の母は介護職についているので祖母の代わりに、曾祖母の入浴の介助へ行つたりしています。私は母に、

「仕事休みの日に入浴介助つてお母さん仕事も介護なのにしんどくないの？」と聞きました。母は笑つて答えました。

「全然！お母さんのおばあちゃんだし、おばあちゃんお風呂入れたら喜ぶからね。」

私はそうか、お母さんはひいおばあちゃんの面倒をみていくと思つていたけれど、楽し

んでいるんだと気付きました。私は介護という事をくわしく知りたくなり、母に仕事の話を聞きました。

「お年寄りのお世話つて大変？」

私が聞くと、仕事の話や介護の話をしてくれました。人は生まれた時から一人では生きていけなくて誰かのお世話になつてている事、そして誰もが年をとり、それに向かつて歩いている事、年をとることは自然な事であり自分たちの未来である事だと教えてくれました。好きで食事やトイレ入浴の面倒をみてもらおうと思つていてるわけではなく、それでも誰もが人の支えが必要になつてくることを知りました。曾祖母も私の名前を思い出せなかつたり、何度も同じことを聞いたりするけれど、それでも私も曾祖母が大好きです。物忘れがひどくなるとかわいそうだと思つていたけれど、母の話を聞いて手助けをしてあげたいという気持ちになりました。一緒に話をしたり手をつないで助けてあげる、こんな少しのことでも支えになるんだと知りました。

人権とは人間が人間らしく生きていく権利、この言葉の意味も高齢者の人権にあてはめてみると差別のない生活を送る権利、幸せに生きる権利があるんだという言葉の意味の深さを感じました。

聴覚障がい者の人権の差別

支援学校中学部二年 木全

匠

私は耳が聞こえない。なので、補聴器をつけて暮らしている。私と同じように、聴覚障害者で事故にあって亡くなつた女の子がいる。

その女の子の親は、逸失利益についての裁判をしている。理由は、女の子をひいた男の人が

「聴覚障害の人は学力が劣っているから健聴者の40%の逸失利益を払う。」と言つてゐる。簡単に言つたら、健聴者と、聴覚障害者は違うと、差別している。もちろん、健聴者とは耳の聞こえ方では違うが、学力は違わない。私が通つている学校の先生の中に、聴覚障害を持つてゐる先生も何人かいる。でも、給料は健聴者と全く同じと聞いた事がある。

差別もいけないことだが、もつとひどいと思つたのは亡くなつた女の子の未来を勝手に決めつける事だと私は思う。もしかしたらその女の子は大人になつて、会社をたてて、たくさんかせいでいた可能性もある。それなのに、男の人は勝手に、聴覚障害の人はいつまでたつても給料は安いままと決めつけてゐる。

私達聴覚障害を持つてゐる人でも、人権はある。自由に働く権利はある。「差別」と言う名のひどい暴力に聴覚障害者はいつまでもがまんしつづけてゐる。

時間はとてもかかるが、この世から、辞典から「差別」という言葉を無くしたい。

みんな平等に暮らせる世の中はいつ来るのだろうか。「差別」がない世の中はいつ来るのだろうか。

障害者の人権

中学校二年 川上竜駕かみ りゅう が

僕は小学三年生のときに股関節の病気になつた。その間、車椅子に乗つていた。車椅子での生活は力のない僕には動かすことが精一杯だつた。また、段差があるところでは自分の力だけでなく周りの人たちに助けてもらつたり、物を落としたときには気づいてくれた人が来てくれて取つてくれたりと周りの人に手助けしてもらつた。学校やシヨツピングモール、いろいろなところに行きましたがどこに行つても手助けをしてくれる人がいっぱいいた。

しかし、すべての怪我をしたり病気になつたりした人を助けるのは難しいと思う。だから世の中をより良く変えていくのが大切だと思う。例えば、スーパーなどに設けられている車椅子マークの駐車場や、電車やバスにある優先座席など、車椅子の人でも暮らしやすい設備がある。しかしそんな中、健常者が車椅子マークの駐車場に車を停めたり、優先座席で優先しなかつたりすることはすべて障害者などに対する人権侵害だと思う。こういった健常者による行為は悲しいほど多くあるのが現状だ。こういったことが起こるのはやっぱり自分がなつていなかからだと思う。自分がなつてなくとも相手のこ

とを考えることが大切だと思う。またそれは障害者だけでなく普段から誰にでもできること、いざというときの行動が変わつてくると思う。

そして、怪我や車椅子の人を見て「可哀想」なんて思つたことはないだろうか。しかし本当に可哀想なのだろうか。障害者の方々は「可哀想」なんて思われたいんだろうか。同情するときでも相手のことを考えて行動するのが大切だと思う。

ある人の言葉で「障害者を助けるんじやなくて、困つている人を助けてください。僕たちもそうやつてもらつた方がありがたいです。」こう思つてている障害者の方の方が多いと思う。また「太陽の家」という障害のある方でも働ける施設がある。この太陽の家は中村裕さんによつて作られた施設だ。この太陽の家、出来た頃はまだまだ小さく、依頼を受ける仕事も少なく中村さんはとても大変な思いをした。それでも諦めないで大手企業を回つた。するとオムロンという会社と共同で会社を作り、それからいろいろな大企業の支援を受けて今では多くの障害者が働いている。そして中村さんは「いつか太陽の家なんてなくなればいいのに」という言葉を残している。もしかしたら中村さんは障害者と健常者との壁をなくしたかったのかもしれない。また大企業が支援してくれたということは社会の風潮が変わつていつているに違いないと思う。ちょっとずつでも変えていけたらなと思う。

最後に、人権をすべて守ることはできないかもしませんが一人一人が自分、そして

相手のことを考えることは難しくはないと思う。障害者とか関係なくみんなでみんなを守っていく、これが人権を守る上で大切だと思った。



自分の経験をいかして

中学校二年 山崎さくら

僕が人権について深く思うことは「女性の人権・男女差別」についてです。昔は、看護婦という女性しか出来なかつた仕事もありますが、今は看護師と、男性も出来るようになった職業が多くあります。その中でも、職場における男女差別です。上司が「君、女だからねえ、こんな仕事まかせられないねえ」と性別を理由にした差別があるのを聞いたことがあります。もちろん、僕はおかしいと考えます。今は、そんなに無いかも知れませんけれど、昔はたくさんあつたと聞きます。もちろん女性と男性の体の構造は違います。ですが「女性は赤ちゃんを産む体だから」や「料理は女がやるんだ」などは、差別で、料理が好きな男性が居るかもしれないのに決めつけるのはよくないと思いました。

次に「女性の人権」です。自分が体験したこと話をします。僕は幼稚園児の時から、小学校の五年生までは、可愛い物が大好きでした。大きなリボンに、ピンクのスカート、流行の物を集めたり、可愛い人形を集めたりして「自分」を楽しんでいました。でも突然気持ち悪くなつて、「自分」を変えました。ピンク色のスカートや、派手な色の服を着るのをやめ、ズボンや暗い服ばかりを着るようになりました。母はそんな自分に気付かず、

スカートを買つて来たりしたこともありました。

そんな自分も、中学生になり自然に自分のことを「僕」と呼ぶようになり、学校の友達にはよく、「なんで僕なの？」と聞かれたりしました。ほとんどの人は気にせず接してくれるのです嬉しいです。

そして、中学二年生、僕は母にも聞かれました。そのときは「自然にこうなつた。」と話しました。その日からは母は、そのことについて話すことはなくなり、服も「自分で買っておいで」と言われるようになりました。今は小学六年生のときよりも「自分」を出せている気がします。

そして、中二の五月、髪をバッサリ切つて自分の好きな「自分」になれました。ある人からは、「ええ、長いほうが好き」と言われましたが、「似合つてる」と言つてくれる人もいて、今の自分を気に入っています。これからも、自分らしく生きていきます。